

10月23日 逍遙



すず
御楼門をくぐる、
のころ

そろそろ夕暮れ時が近づいてきて、薄暮の頃の白と黒の明暗を見分けるのが得意な、そんな猫のワタシの目の前に今、照國神社の大鳥居と同じぐらい見上げてしまう立派な城門が…ちょうど、この門を復元する際の解析資料となった、当時のレトロな古写真そのままに、威風堂々の姿でそそり立っています。これがあの御楼門ですね。周りには、一休みできる木製のベンチも幾つか置かれていますが、もう夕方なので、今日はそのまま御楼門の方へ。

そろり、そろりと用心しながら石段を下りていくと、程なくワタシを優しく包んでくれるマツやケヤキの新鮮な香り。そんな優しさの主たちこそが実は、この城門の威厳をも体現しているのです。逍遙館長さんも言っていたとおり「正面の敷梁には、手斧を用いた伝統的手加工による魚の鱗のような紋様があって、簡素な中にも重厚感があり、鎌倉以来七百年間も続いた大名・島津家の、武家としての精神と歴史を感じる」雰囲気は確かにあります。

そして、御楼門をくぐり抜けると、石橋の先にはまた、いつもの車の喧騒が…

次回「懐かしさの向こうには、のころ」

